令和８年度　文化財めぐり２

「畠山重忠の生地と鎌倉街道上道を訪ねる」

令和８年 10 月 23 日（金）
嵐山史跡の博物館

概要

深谷市畠山は、鎌倉時代の武蔵武士、畠山重忠の生地と伝えられ、畠山館跡をはじめ、数々の伝承地があります。また、西方約１㎞には「鎌倉時代上道」伝承路が通り、掘割状道路遺構が保存されています。今回は、畠山重忠の生地と鎌倉街道上道を訪ねます。

コース

秩父鉄道永田駅前（10:30 出発）―井椋神社―満福寺―畠山重忠公史跡公園―普光寺・鎌倉街道碑―男衾コミュニティーセンター（昼食）―推定「鎌倉街道上道」跡（赤濱天神沢遺跡）―「鎌倉街道上道」碑―畠山重忠公歴史公園―永田駅（15:00～15:30 解散）

周辺の地形・地理

深谷市畠山は、北と西を荒川流路、南を江南台地に画された平坦な河岸段丘（河川低地）にあたります。畠山氏の祖先である秩父氏は代々秩父郡吉田郷を拠点としていましたが、平安時代末期に重忠の父、秩父重能（ちちぶしげよし）が男衾（おぶすま）郡畠山荘の館を移し、「畠山庄司（しょうじ）」と名乗りました。その後、畠山重忠は鎌倉時代に菅谷（現嵐山町菅谷）に館を移しましたが、この地には畠山氏の菩提寺や氏神など、いくつかの伝承地が遺りました。

深谷市畠山から西方約１㎞には「鎌倉街道上道」が通り、街道沿いには「塚田宿」、荒川の荒川渡河点には「赤浜の渡し」があったと伝えられます。現地では「鎌倉街道上道」伝承路を一部辿ることができ、普光寺（ふこうじ）や塚がみられます。

「鎌倉街道上道」伝承路は、六大塚遺跡、赤浜天神沢遺跡において発掘調査が行われ、一部現地保存されており、台地上から比高約 20ｍに及ぶ荒川の河川低地へおりていく掘割状道路遺構を観察できます。

主な遺跡・文化財（見学ポイント）

① 六堰頭主工・重忠橋

重忠橋からの景観

江戸時代初期に作られた荒川から田地に水を取り入れる六つの堰を昭和四年（1929）に一つにまとめた六堰頭首工が完成、平成十六年（2004）には、現在の新しい六堰と用水路に改修されました。重忠橋はこの時に六堰の管理用道路として新設され、公募により畠山重忠の名を冠した名称が付けられました。

② 井椋神社・鶯の瀬

井椋神社は畠山重忠の父、重能が秩父郡吉田郷から畠山に館を移した際、重能の祖父重綱が秩父郡の椋神社を勧請し、畠山氏の氏神として祀ったと伝わります。神社裏手には鶯の瀬が、畠山重忠に由来する荒川の浅瀬として深谷市の名勝となっています。

鶯の瀬

③ 満福寺

満福寺観音堂

鳥羽天皇の時代に開山、畠山重忠によって中興され、畠山氏の菩提寺になったと伝わります。文政十一年（1828）に編さんされた地誌「新編武蔵風土記稿」（以下、新記）には、観音堂の千手観音像が本尊とされ、観音堂裏手には畠山重忠墓があったと伝えられています。境内には板碑が散見されます。

④ 畠山重忠公史跡公園（畠山館跡）

畠山重忠公史跡公園

畠山重忠が誕生したと伝わる「畠山館跡」が整備された史跡公園。重忠産湯の井戸、畠山重忠墓（県史跡）、嘉元二年（1304）銘板碑（市文化財）、父重能の墓（市文化財）などがあります。「畠山館跡」は 5 回の発掘調査が行われ、中世の遺構では堀跡、溝、火葬墓とみられる石組遺構が確認されました。

⑤ 塚田三嶋神社・鰐口

「鎌倉街道上道」が通る塚田集落の三嶋神社に伝来する応永二年（1395）銘鰐口。銘文中に「武蔵国男衾郡塚田宿」と記すことから、室町時代には現在の塚田集落に「鎌倉街道上道」沿いの宿があったことを示す貴重な史料です。

←鰐口（「新編武蔵風土記稿　巻之二百二十四　男衾郡之三　鉢形領之二　赤濱村」より）

⑥ 普光寺・「鎌倉街道上道」碑

普光寺本堂

「鎌倉街道上道」伝承路に接する天台宗寺院で、街道沿いの中世寺院とみられます。本尊は平安時代の作とされる阿弥陀如来坐像を安置し、境内及び周辺から一か所に集められた板碑群約50基と五輪塔群が見られます。本堂裏手には掘割状遺構があり、「鎌倉街道上道」から分岐する古道だった可能性があります。境内の南東角には「鎌倉街道上道」の碑が建ちます。

⑦ 推定「鎌倉街道上道」跡（赤浜天神沢遺跡・畠山天神沢遺跡）

塚田集落、普光寺から伸びて、荒川右岸の低地に向かう「鎌倉街道上道」伝承路は、これまでに全長約250ｍが発掘調査され、一部が現地保存されています。2022・2023年の調査では、全長約190ｍもの掘割状道路遺構が確認され、18世紀後半以降の「第１面」と、中世段階とみられる「第２面」の２つの硬化面（路面）が検出されました。「第１面」は、幅員約5.7～1.9ｍで、検出された火山灰（浅間Ａテフラ）の分析により、江戸時代後期も道路として機能していたことが分かりました。「第２面」は、幅員約10.5～５ｍで、複数回の側溝の付け替えや路面の補修を伴い、路面中から出土した板碑片の製作年代から14世紀代の築造とみられます。

掘割状道路遺構の脇には、同遺構に沿うように、掘立柱建物跡、柵列後、井戸跡、区画溝、墓とみられる土坑などが確認されました。井戸跡は14～15世紀代、掘立柱建物跡が15世紀以降、土坑は14～16世紀前半に収まり、人の往来が活発であった時代は、出土遺物が最も多い14～15世紀代と考えられます。

推定「鎌倉街道上道」跡

⑧ 赤浜の渡し・川越岩（かわこしいわ）

赤浜の渡しは荒川を挟んで男衾郡赤濱村（現寄居町赤浜）と榛澤（はんざわ）郡荒川村（現深谷市荒川）を結ぶ中世から近世にかけての渡し場で、武蔵国と上州・信州とを結ぶ交通の要衝でした。鎌倉時代には「鎌倉街道上道」の荒川渡河点とみられ、「新編武蔵風土記稿」（以下、新記）によると、「昔鎌倉繁栄の頃」の渡し場「半左瀬（はんざせ）」の呼称が伝わります。川越岩は川の中の大きな岩で、荒川の水量の目安になり、徒歩で渡れるか否かの目印になったようです。

戦国時代には合戦の場として記録が残ります。明応三年（1494）、関東管領上杉顕定と扇谷上杉定正・伊勢宗瑞連合軍が荒川を隔てて対峙し（「石川忠総留書」）、永禄四年（1561）、太田資正と上田朝直が「赤浜之原」で合戦をしたと伝わります（七月二十七日太田資正感状「道祖土家文書」）。

江戸時代以降には、中山道脇往還（川越・児玉往還）の赤濱宿（赤濱村）と小前田宿とを結ぶ渡し場として機能しました。赤濱村と対岸の荒川村を結ぶ渡船場が設けられ、両村が管理する船２艘、渡守１人を置いていました（新記より）。

明治時代初期の迅速側図によると、渡し場がさらに上流になったことがわかります。昭和二十二年（1947）、その場所に木造の冠水橋（最初の花園橋）がかかり、渡船場は廃止されました。

赤濱渡之図（「新編武蔵風土記稿　巻之二百二十四　男衾郡之三　鉢形領之二　赤濱村」より）

推定「鎌倉街道上道」跡から荒川と花園橋をのぞむ